

しよほう

平成 24 年 3 月 22 日発行
伊勢市小俣町元町 540 番地
事務室 0596-22-7900
教育相談 0596-22-7867
教育支援センター 0596-22-7901
FAX 0596-22-7898

第11号

【目次】

| | | | |
|-----------------------|-----------------|--------|-----|
| 巻頭言 | 伊勢市教育委員会教育委員長 | 楠田 英子 | P 1 |
| 学び続ける教師であるために | 教育研究研修係長(兼)指導主事 | 服部 朱美 | P 2 |
| 平成 23 年度研修講座を振り返って・・・ | | | P 3 |
| 「NEST」での 1 年間を振り返って | 「NEST」指導員 | 榊原 康 | P 4 |
| 外国語活動の研究に取り組んで | 研修員 | 北岡 美代子 | P 5 |

巻 頭 言

伊勢市教育委員会教育委員長 楠田 英子

1990 年代の半ば、それまでは政府や大企業や大学だけに利用が限られていたインターネットが個人向けサービスとしても開発され始めました。当初は一部の層の趣味の手段として使われていたそれは、数年で瞬く間に日本中に普及します。Windows95 が世に出た年に生まれた子どもたちは高校生、iMac 発売年に生まれた子どもたちも今では中学生。彼らにとってのパソコンとは TV や冷蔵庫と同じく、生まれたときから身近に存在する家電のひとつではありません。今やインターネットの存在自体の是非を問う議論さえ、ほとんど見かけなくなりました。

このように情報化の側面だけを取り上げてみても、急激に変化し続ける社会の中で多感な時代を過ごす子どもたちは大変です。自分自身も気付かないまま種々のストレスを増大させ、同質的な小さな社会にしか身を置けず、それも能わなくなると家庭にも学校にも適応できなくなってしまうのは当然の成り行きかもしれません。しかし本来人と人が交わればストレスが生じるのは当然であり、覚悟を持って生きるべきであること、一方でそれに惑わされる自分を否定する必要もまったく無いということ子どもたちには解って欲しいと心から願います。そのためにも、まずは大人が正しい情報リテラシーを身につけ、誤った情報や偏った価値観に流されないよう日々心掛け、その上で子供たちを導いてやらねばならないと思うのです。

それでもさまざまな事情で問題は生じ、家庭や学校だけの力では解決できなくなったとき、どのように救いの手を差し伸べるかが教育行政の課題となってくるのでしょうか。とくに情報化社会とストレスという問題を考えると、教育研究所の果たす役割がとれほど大きいものであるかが解ります。情報教育研究・不登校児童生徒への教育支援・教職員研修という「実践的」な研究に日々携わるこの教育機関が、いかに頼りがいのある存在であるか。改めて認識した次第です。

学び続ける教師であるために

教育研究研修係長（兼）指導主事 服部 朱美

今年度の研修講座が終了しました。たくさんの方にご参加いただきましたことを感謝申し上げます。先生方の学びがより充実したものになるために、どのような支援ができるのかを考え、講座の構築に取り組んできました。

今年度は、「子ども理解」「学級経営」「授業づくり」「特別支援教育」「情報教育」「教育相談」など様々な今日的教育課題をテーマにした研修を行いました。夏季休業中を中心に行った講座では、手前味噌ですが、その道の一線級の講師をそろえることができたと自負しています。さすがに各講師の言葉には含蓄があり、学ぶことが多いものでした。

その中の一つ、「国語教育」では、昨年度に引き続き、筑波大学附属小学校の二瓶弘行先生を講師に招聘しました。昨年度は、説明文教材の授業づくりについての話でしたが、今年度は、それを受けての実践編としました。説明文教材を使った二瓶先生の師範授業からは、「たくさんのことを学んだ」という声を多く頂きました。説明文を学習材にして、子どもたちにどのような「言葉の力」を育てたいのかと投げかけられ、読解力と自己表現力を育てることを目標とした授業でした。授業後の話の中での「未来を生きていく子どもたちにどんな力をつけていかなければいけないか。そのために、私たち教師ができることは何か。」を常に問い続けていかなければいけないという、二瓶先生の問いかけは、深く心に残りました。師範授業を通して、また、その後の講義を通して、説明文の授業というだけでなく、教師としてのあり方を学んだ気がします。

秋から冬にかけては、「授業公開」を中心とした内容で開催しました。私たち教師の実践力が最も顕著に発揮される場面は、いうまでもなく授業です。授業を通して見えることや分かることはたくさんあります。授業について共に考え共に学ぶ場としていただけたことと思っています。「授業力」(=良い授業をつくる力)の向上は、学校教育の充実に直結しています。今さらいうまでもありませんが、授業を充実させていくことは、教育活動の基本であり、教師の責務です。よりよい授業をつくっていくために、今後も共に考え共に学んでいきたいと考えています。また、「教師が学び、教師が変わってこそ、授業が変わり、子どもが変わる」とはよく言われることですが、子どもたちのために私たち教師が学び続けることは、ますます重要になると感じています。「こんな授業をしてみたい」「こんな学級をつくりたい」という具体的な目標を持ち、自ら求めて学ぶ研修を続けることが、日々の授業の充実や改善につながります。教師が自分の課題に向き合い、学びの経験を重ねることが、子どもの学びにつながると信じています。

一つ一つの講座の中に、それぞれの先生のそれぞれの学びがあったことと思います。研修講座をとおり、今後も学び続ける教師であるための支援をさせていただきたいと考えています。講座へのたくさんのご参加をお待ちしています。

平成 23 年度研修講座を振り返って・・・



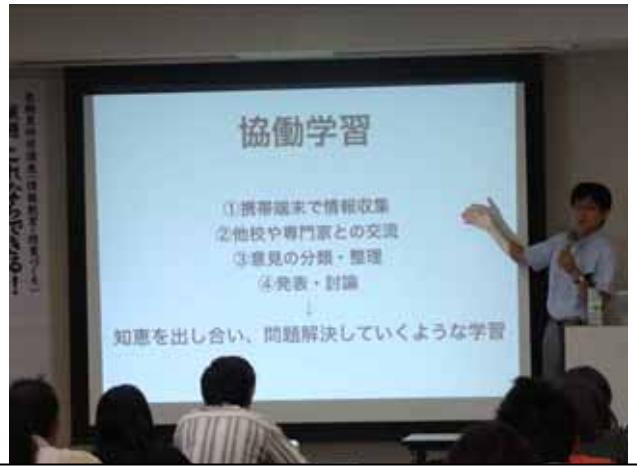
二瓶 弘行先生
「説明文を通して育む言葉の力」



直山 木綿子先生
「評価から見直す外国語活動」



細水 保宏先生
「魅力ある算数・数学の授業をつくるコツ」



中川 一史先生
「これならできる！ICTを活用した授業づくり」



Sean Hael 先生
「Sean 先生の英会話講座」



米田 薫先生
「教育にカウンセリングを活かそう」

「NEST」での1年間を振り返って

教育支援センター「NEST」指導員 榊原 康

「NEST」での勤務約1年、支援センターの在り方はもとより、教育全般を考えさせられた1年だったと思います。

「NESTでは元気になってきたのに、何で学校には行けえへんのやろ？」
月日が経つにつれて、この思いが強くなってきました。静かな時間が過ぎることも多いのですが、積極的にバドミントンや卓球を楽しんだり、私の面白くない親父ギャグにでも、反応を示してくれる子どもたち。毎日の葛藤と同時に、「NEST」の存在意義を考えます。



南伊勢町でのキャンプ

思い起こせば、彼らと初めて出会った時、彼らは私を快く(?)受け入れてくれました。前任者の熱心さについては、かねがねお聞きしていたので、「気持ちだけは負けないぞ。」と思いながらも、私にとって子どもたちは「NEST」の先輩という意識もあって、彼らに教わりながら時を過ごしてきました。

カードゲーム、バドミントン、卓球、学習時間、潮干狩り、パン作り体験、宿泊体験といった様々な活動をし、共に過ごすにつれ、お互いの関係が深くなっていったように思います。

子どもたちは「NEST」を安心して過ごせる居場所と感じ、指導員や子どもたち同士との関わりを通して、人と関わる楽しさを体験し、エネルギーも溜まってきました。私たちはそんな子どもたちの様子を見守り、学校の先生方と連携を図り「学校復帰」に向けてタイミングを見計らって背中を押してきました。その結果、球技大会、学級でのリクリエーション活動、定期テストなど部分登校できる子どもたちが増えていきました。勇気を振り絞って部分登校を終えた子どもたちの顔には、わずかな自信が伺えます。部分登校を重ね、来年度からの完全学校復帰が見えてきた子どもたちもいます。



NEST 沼木の農業体験

しかし、「NEST」に通級し始めたものの、通級が途絶えてしまったり安定した通級ができなかったりする子どもたちがいることは課題であり、今後の支援のあり方を考えていかななくてはなりません。

「NEST」に通級してくる子どもたちは「学校へ行きたい」という思いを持っています。その思いに応え、子どもたちが元気に学校復帰していけるような支援を学校と共に行っていきたいと思います。

外国語活動の研究に取り組んで

研修員 北岡 美代子

本年度、教育研究所の研修員として「外国語活動の研究」に取り組んできました。まずは、研修の機会を与えていただいたこと、研修を進めるにあたり、多くの方々にご協力、ご指導をいただいたことに感謝しています。

4月には、倉田山中学校にお願いし、1年生の外国語科の授業を参観させていただきました。私は平成22年度と23年度に6年生を担当し、移行期間として外国語活動に取り組んでおりましたので、外国語科の入門期における生徒の様子をぜひ知りたいと思っておりました。参観させていただいて、中学校の先生方が小学校での外国語活動の要素をうまくつないでみえることを知りました。授業の進め方やルール、学習のしかたなどについて、「外国語活動」から「外国語科」に生徒の意識を切りかえながらも、小学校でも行っていたゲームなどのアクティビティや、生徒どうしのコミュニケーション活動を取り入れた楽しい授業を展開されていました。また、先生方やALTが話すクラスルームイングリッシュに対して生徒が戸惑うことなく、英語による指示を理解していたことも印象的でした。生徒たちは外国語活動で、音声面での英語への慣れ親しみができていることを感じました。

私は研究のメインテーマを「特別支援学級での外国語活動」とし、明野小学校に研究協力をお願いして取り組んでまいりました。小俣中学校にもご協力をいただき、中学校のALTと児童が交流する機会を持つことができました。1月11日の実践報告には、中学校からも8名の先生が参加してくださいました。研修期間中、中学校の外国語科の授業を何度か見せていただきました。小学校と中学校、それぞれの実態を知り、情報交換することで、小学校外国語活動の目標に沿った指導について、視野を広げることができました。

明野小学校には、校長先生、特別支援学級の先生方はじめ、職員の皆様に、多大なご配慮とご指導をいただきましたおかげで、多くを学ぶことができました。研究・研修に取り組むにあたっては、子どもとの関わりを深め、子どもの成長を見守りながら、日々の実践に取り組んでいきたいという思いがありましたので、外国語活動に限らず、国語や算数、体験学習など、様々な学習や活動に関わらせていただきました。普通学級での外国語活動の授業も参観させていただきました。

「特別支援学級での外国語活動」については、以前から取り組んでみたいという思いを持っていました。外国語活動は、人と人をつなぐコミュニケーション活動であるからです。特別支援学級の児童には、言語の遅れや知的・情緒面での障がいなどにより、人とコミュニケーションを図る上で困難を抱え、自分から人に話しかけることや、気持ちや思いを伝えることが難しいという面がみられることがあります。特別支援学級児童にコミュニ



ケーション能力の素地を養っていくことは、彼らが人と関わって楽しく生活を送り、将来的に社会参加していく上で、特に重要なことです。外国語活動において、コミュニケーションを図る楽しさや仲間と力を合わせる体験をたくさんさせたいと考え、取り組んできました。このような体験の一つ一つが、生きる力につながっていくことを願っています。

明野小学校の特別支援学級では、担任の先生方から児童が安心して学習できるような工夫、やる気や自信を持たせる声かけなどを学びながら、一人一人のニーズに合わせた外国語活動について、研究実践をさせていただきました。学級の児童はとてもかわいく、私が教室に行くと、「やったあ。英語や。」と言って笑顔で迎えてくれました。活動の途中では、何度もガッツポーズやハイタッチを見せてくれました。児童の学ぼうとする意欲や自信がみられたことは、私にとって研究の一番の成果であると考えていますし、私自身の励みにもなりました。児童のやさしさや思いやりの気持ちが表れ、助け合ったり、教え合ったり、友だちとほめ合ったりする姿や場面もみられました。そして、表現する経験を重ねる中、授業で一言も話すことのできなかつた児童が「ありがとう」という言葉を発した瞬間は、うれしさでいっぱいになりました。



助言者の鷹巣先生のお話

「将来に生きて働く力となるような外国語活動の在り方」

私が、研究所の課題研究プロジェクトとして、授業研究・実践報告をさせていただくのは、今回で3度目です。平成18年度には石井順治先生にご助言をお願いし、3年生の国語（モチモチの木）の研究授業に取り組みました。平成21年度には中森早苗先生にご助言をいただき、6年生における外国語活動に、そして今年度は、研修員として、「特別支援学級での外国語活動」をテーマに研究報告をさせていただきました。今回も多くの先生方や講師の鷹巣雅英先生から丁寧で温かいご指導をいただくことができました。

自分の授業を人に見ていただく際には、多少のプレッシャーや恥ずかしさも感じますが、講師の先生や参加された先生方から、幅広いご助言やご指導をいただけると、それらが自分の力になることを実感します。そして、自分の課題を自覚して、次の目標を見出すことができます。

今回の研修により学んだことを、また次の研究・実践に活かしていきたいと思えます。拙い研究報告ではありますが、研究所紀要に報告レポートを載せていただきました。お手元に届きました際には、ご高覧いただき、ご指導をいただければありがたく存じます。

研究にご協力、ご指導をいただきました先生方、
本当にありがとうございました。

